



# 第18回 日本体験学習研究会全国大会 大会報告

発行：第18回日本体験学習研究会全国大会運営委員会事務局

発行日：2017年8月21日

## ラボラトリー方式の体験学習を学ぶ

～プロセスを大切にすると何か～

### 第18回日本体験学習研究会全国大会を終えて

6月17日（土）・18日（日）の二日におわり、南山大学にて日本体験学習研究会第18回全国大会が開催されました。これまでは12月開催が恒例でしたが、南山大学のアカデミック期間のクォーター制度が今年度より始まったことにより、6月開催になりました。慣れない時期の開催も影響したのか、少し参加者が少なかったのが残念でした。ただし、その人数の少なさ故に、じっくりと各セッションを楽しめたり、懇親会でも濃密な親交の時をもったりできたのではないのでしょうか。

久しぶりに、運営委員会企画として、3つほどのワークショップも開催することができました。また、南山大学の教員スタッフ3人によるセオリーセッションもたくさんの刺激をいただくことができました。

2日間の全国大会の中で、ラボラトリー方式の体験学習のこれから、そして本研究会のこれからをいろいろと空想することもできました。いくつか浮かんだアイデアを、閉会の時にお話をさせていただきました。

- ① ラボラトリー方式の体験学習の大きな夢は？私たちのビジョンの必要性
- ② 気づきの学習：同じ環境でも気づきが起こると見える世界が変わる
- ③ 実感を伴う学び：腑に落ちる・概念を創り出す
- ④ 時間の流れの大切さ：学びが醸成され、生き方に影響する
- ⑤ 展望・将来を見据えた今ここの体験の大切さ

私にとって、これからもラボラトリー方式の体験学習の可能性を信じて、もう少し生きていこうと思えた2日間になりました。

第18回大会の開催を支えてくださった運営委員会のみなさま、学生スタッフのみなさん、そして参加者のみなさまに感謝申し上げます。

2017年8月21日

大会運営責任者

津村 俊充

# ワークショップ報告

## 「初心者のためのワークショップ」 体験学習を体験する—『体験学習』と出会う—

運営委員企画として、研究会では、「ラボラトリー方式の体験学習」を体験したことのない方々に、その学び方の基礎を紹介し、実際に集まった人たちと関わりの体験をするワークショップを実施しました。今回は、情報紙を使った「持ち寄りホームパーティ」という実習を用いました。

まず初めに、「ラボラトリー方式の体験学習」の学び方の基礎として「体験学習の循環過程」と呼ばれている EIAHE' のサイクルを紹介しました。

そのあと、ご参加いただいた 11 名の方々に 2 つのグループに分かれてもらい、互いに自己紹介をしました。自己紹介終了後は、ワークショップが始まってから自己紹介をするまでの時間、自分が気づいたこと、感じたことをメモ用紙に書き出す作業をし、そのメモを用いて、同じグループの人と、互いが感じていたプロセスをシェアしました。

次に、それぞれのグループで話されたことを、ファシリテーターが「コンテンツとプロセス」という人間関係を観る 2 つの視点でとらえ直し、「ラボラトリー方式の体験学習」で注目してもらいたいことを伝えました。

学び方の基礎を知ってもらったところで、さっそく情報紙を使った実習「持ち寄りホームパーティ」を行っていきました。このワークショップのねらいは、「『ラボラトリー方式の体験学習』の学び方を知ること」と、「グループの中で起こるさまざまなことに気づく」「人と関わるときの自分の特徴を知る」というものでした。そのねらいを念頭におきながら実施しました。実習は 30 分間行い、1 グループが正解しました。

そして、ねらいの観点から、実習の体験を思い起こし、感じたことや気づいたこと、自分の特徴はどこにあるか、他者の様子はどうかであったかなどを、ふりかえり用紙を使って言語化していき、その後、ふりかえり用紙をもとにグループごとでシェアし、今日の自分と自分たちのグループのありようを検討しました。

参加者のみなさんは、率直に今ここでの体験をわかちあわれているように思いました。インタビューでは、偶然出会ったメンバーとの関わりから、自分なりの気づきを得られたという感想をいただきました。また今回の体験を日常の自分とつなげて考えることもなさっており、体験から人間関係を学ぶ一つの方法としての「ラボラトリー方式の体験学習」を知ってもらうことができたのではないかと思います。

(文責：古田 典子)

## 「対話のじかん／プロセスを大切にすると何かをわかちあう」

それぞれの方が「プロセスを大切にすると何か」を自由に対話することを期待して参加してくださいました。場を提供する私たちも「プロセスを大切にすると何か」をご自身で発見し「何か」の感覚を掴んでいただくことを目的として、こちらからあらかじめ用意しておくことは、極力せずに、実施させていただきました。

はじめに「このワークショップへの期待」「あなたのプロセスのイメージ」「このワークショップが終わった時にどうなっていたいか」を絵で表現し、チェックイン時に全員でシェアしました。その後、私たちも含め 5 グループ (18 名) に分かれてワールドカフェ形式で 3 テーマについて対話を重ねました。対話のテーマ

は、参加者から自由に提案していただき、それらの要素を統合することにより次の3つに決まりました。

「場づくりをどのように考えて行っているか」

「制限されることが多い世の中でどのように考えて生きているか」

「プロセスなど自分自身が大切にしていることを、どのように他者に伝えているか」

この対話は、「プロセスを大切にすると何か」を頭の片隅に置きながら話し合っていました。各テーマごとにグループ編成を変え、より多くの方との関わりの中でテーマへの考えを伝え合いました。そして最後に気づいたことを全員でシェアしました。2時間の中でそれぞれの方が「プロセスを大切にすると何か」の答えを考え、気づきが得られた時間になっていれば幸いです。多くの方のご参加ありがとうございました。

(文責:服部 剛典)

## 「プロセスに光をあてる」

第一部「個人レベルのプロセスに光をあてる」は、プロセスとは何かを考える導入として、「同心円実習」でスタートしました。1グループ8人の二重の円を2つ作り(8×2×2)、円の内側の人と外側の人がペアになり、津村先生から出されるワクワクそしてちょっぴりドキドキするお題に対してのフリートークを、途中ペアをかえながら2分間×4回行いました。

ペアでのフリートーク中の体験をふりかえり、自分がどのように話していたか、どのように聴いていたかなどを紙に書き出した後は、4人グループになってそれぞれの気づきをわちあいました。

次は津村先生の30分間の白熱教室。人と関わる視点としてのコンテンツとプロセスの要素や、ラボラトリー方式の体験学習の特徴を、あるときはウェインシュタイン&アルシュラーの“体験を語る発達段階”、またあるときはロジャーズの“中核三条件の態度”をはさみながら熱く語る講師と、熱心に聞き入る熱い参加者との真剣勝負となりました。

休憩後の第二部「グループレベルのプロセスに光をあてる」では、「チームリーダーに大切なことを3つ選ぶ」というお題に対する10分間の討議を6人のボランティアに実施していただきました。残りのメンバー全員で6人の討議の様子を観察し、どのような働きかけの可能性を探り、討議終了後は全員でディスカッションしながら、①コンテンツ、②タスクプロセス、③メンテナンスプロセスへの働きかけ方をじっくりと考えました。

あっという間の2時間15分。終了時は、講師も参加者も頭から湯気が出ているような状態でした。真剣に討議を繰り広げてくださった6人のボランティアの方々、そしてプロセスに光をあてることに集中し、積極的に意見を出し合ってくれた参加者の皆様方、本当におつかれさまでした。会場が熱気あふれる空間になりましたのも、皆様のご協力のおかげです。心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

(文責:横井 れい)

## セオリーセッション

### 「ラボラトリー方式の体験学習で何を学んでいるのか？」

本セッションは、体験学習を学術や理論の側面から検討しようという、これまでにない新たな試みでした。テーマを決定するにあたって、第18回大会スローガンに基づき「私たちは、何を目指してラボラトリー方

式の体験学習（ELLM）を実践しているのだろうか？」という問題意識に立脚し、企画を立案しました。

当日のセッションでは、池田による「企画説明」に続き、中村が、ELLMに関する共通理解の確認を目的に、ELLMの根底にある「コンテンツとプロセスの視点」と「ELLMの学習過程」について紹介しました。続いて池田が、「『ラボラトリー方式の体験学習』のアウトカム評価」というタイトルに基づき、ELLMに関わる実証研究の中で効果として取り上げられているのが「ソーシャルスキル」に偏っていることを指摘し、ソーシャルスキル以外に、ELLMの効果として何が考えられるだろうかという問題提起をしました。

池田の問題提起に基づき 20 分ほどのフロアでのグループ討論を行った後、中村が、自身が行った調査研究の結果から、体験学習を実施しなかった学生では「プロセス視点重視」「感情共有重視」「体験学習過程重視」「自己発見動機」という指標で値が低下しているのに対して、実施した学生ではこれらの得点が上昇していることを報告しました。そして、こうした指標が、体験学習の効果を示す新たな視点となる可能性について提案されました。

続いて、土屋が、「『人間関係学習論』の枠組みで捉える体験からの学び」という表題で話題提供を行いました。土屋は、体験学習とは「人間関係に関するルール・法則の追加・変更・整理を行う学習論の一つの形態である」という視点を提示し、時間的、空間的広がりを持った学習観としての体験学習の姿を多様な視点から説明しました。

その後、フロアでグループ討論、ついで全体でのディスカッションが行われました。全体でのディスカッションでは多くのコメントや質問が寄せられ、活発な意見交換が行われました。さらに話題提供を行った 3 名も、互いの提供した話題に対して意見を述べ、ELLMを含めた様々な体験学習において、実践の推進とともに、「どのような効果があるのか」「なぜ効果があるのか」という課題を実証的視点から探索することの大切さが、参加者全体で共有されたようでした。また、話題提供の中で取り上げた先行の研究事例に携わった方々も数名、フロアにいらっしや、セッション後、「上手にケンカを売っていただいて、良いセッションでした」という感想をいただき、実りのあるセッションであったと思います。

最後に、本報告を執筆するにあたってセッションをふりかえる中で、筆者である池田が考えたことを述べたいと思います。ELLMの実践にあたり、「何を目指しているのか」を明確に提示することができなければ、ELLMの良さや意義をひとに伝えることは困難です。また、ELLMの手法や技法のみが独り歩きし、目的を考慮しない実践が試みられるようになり、「ELLMには（実践者が望んだ）効果がない」という烙印が押されてしまう心配もあります。「ELLMで何を学んでいるのか」という問いの答えを探すことは容易ではないだろうし、終わりのあることでもないかもしれません。しかし、この問いに真摯に取り組む続けることは、ELLMに関わる私たち一人ひとりが負っている責任なのだと思うのです。

（文責：池田 満）

## 全体会報告

大会最後の全体会は、南山大学大学院教育ファシリテーション専攻の修士2年が企画、担当しました。今大会のスローガンが「ラボラトリー方式の体験学習を学ぶ～プロセスを大切にすると何か～」であることを踏まえ、「①日体研2日間の自分自身のふりかえり②日常へつなぐかけはし」を全体会のねらいとしました。

まず2日間をふりかえるにあたり、2分間の瞑想の時間をとりました。アクティブになった頭と体を一度落ち着けていただきたいの思いからです。静かな時間でした。その後、1人で、ワークシート「My Experienceシート」を利用して、この2日間をふりかえり、どのようなことが起きていたのかを、出来事とその時の心の動きやありようの観点から自由に記入しました。次に、3人組を作り、今書いたことを伝え合う時間としました。他の人に話すことで、自分の気づきがより明確になったり、お互いに共感しているような姿も見られました。そして、もう一度1人になって、この大会の「おみやげ」として、自身が日常へ持ち帰りたいこ

と、誰かに伝えたいことなど、をシートに書き入れました。最終プログラムですので、さすがにお疲れもピークのように見受けられ、会場にあるお茶やお菓子などで一息つきながらの時間となりました。少し和んだ中で、先ほどと同じ3人組で「おみやげ」を伝え合いました。最後には、全体でわちあい、学部生も含めた5名の方がそれぞれの日常へつなげたいことや感想などを積極的に発言してくださいました。

今回、全体会を企画することは、同期の私たちの中にある「プロセス」を見つめなおす時間にもなり、まさに体験から学ぶ機会となりました。先生方、先輩方、学生スタッフの方々の支え、そして何よりも当日全体会に参加して下さった皆様方に感謝申し上げます。

(文責 高橋 直子)

## 会計報告

### 【収支報告】2017年7月14日現在

#### 大会

##### 【収入の部】

大会参加費	268,000
広告協賛	120,000
関東大会寄付金	140,000
その他	19,962
計	¥547,962

##### 【支出の部】

印刷費	90,550
郵送費	11,235
事務局費	43,004
大会運営費	322,043
日めくり作成代	140,000
その他	3,686
計	¥610,518

大会収支総計 ▲62,556

#### 懇親会

##### 【収入の部】

懇親会参加費	148,000
--------	---------

##### 【支出の部】

懇親会費	240,000
------	---------

懇親会収支総計 ▲92,000

全体の収支総計 ▲154,556

今回の大会は、残念ながら大幅な赤字となってしまいました。1年半ぶりに、そして初めて6月に開催された今回の大会は、参加者が例年の7割程度にとどまり、収入が大きく減ってしまいました。その一方で、準備は例年と同じ規模で進めていたため、特に懇親会では大きな赤字を計上する結果となりました。今回の赤字だけについて言えば、これまでの繰越金でやりくり可能な範囲ではありますが、今回のこの状況を受け、改めて様々な点から見直しを行い、より多くの方々に参加したいと思っていただけるような魅力的な会を目指していきたいと感じております。

なお、今回は、2016年に開催されました関東大会様より14万円の寄付金をいただき、それを全額活用して、オリジナル日めくりカレンダーを作成、大会当日に参加者のみなさまへプレゼントさせていただきました。関東大会関係者の皆様、カレンダー作成に多大なるご協力くださった皆様に、心より感謝申し上げます。

(会計 中尾 陽子)

## 第 19 回大会に向けて

日本体験学習研究会第 18 回全国大会にご参加いただいた皆さま、ご参加ありがとうございました。開催時期が変わったこともあり、従来よりも参加者数が減ってしまいましたが、新たな試みができる大会でもありました。2016 年度関東大会からご寄付いただいた原資で、運営委員の土屋さんと横井さんのご尽力で、宝物のような記念品（卓上カレンダー）ができたことも、今回の大会の素晴らしい成果だと感じています。大会中、「これまで南山の皆さんに大会開催をしていただき、これが当たり前だと思っはいけない。私にできることがあれば言ってください」という、うれしい声も参加者の方からいただきました。

私ども南山のスタッフの事情で、卒業論文などで非常に多忙な 12 月から、6 月に開催時期を変更させていただきました。開催時期を変更したことで、大会に参加できなくなった方々もいらっしゃるだろうと推測しています。日程が合わず、大会に参加できなかった皆さまには大変申し訳ありません。

大会後の 7 月下旬に行われた運営委員会では、次回の大会となる第 19 回大会の開催をどうしていくかについて、本音の対話を行いました。そして、体験学習のファシリテーションについて相互に研鑽しながら、体験学習について探究していく、この全国大会の場は今後も続けていきたい、という意志を確認しました。それとともに、お互いに無理や遠慮をしないこと、開催することを義務としないこと、なども話し合われました。たとえば、発表申込が少なければ、運営委員が枠を埋めるために発表をするのではなく、大会のスケジュールを短くするなどのアイデアも出されました。

そのような対話を経て、次回の大会（日本体験学習研究会第 19 回全国大会）は、2018 年 6 月 23 日（土）と 24 日（日）に開催することを決定しました。ただし、発表申込数が少ない場合は、6 月 24 日（日）の 1 日のみの開催とする予定です。体験学習を愛する皆さまによって創られている大会です。ぜひ、来年度のスケジュールに大会日程を書き込むとともに、次回大会の発表募集の際に発表のお申し込みをどうぞよろしくお願いします。

第 18 回日本体験学習研究会全国大会 事務局長 中村 和彦

### 【第 18 回日本体験学習研究会全国大会 運営委員会】

委員長：津村俊充            事務局長：中村和彦  
委員：池田満、鎌田美保、木下芳美、杉山郁子、高橋直子、土屋耕治、中尾陽子  
服部剛典、古田典子、横井れい、横山佳奈子       （五十音順）  
（事務局）水野菊代  
共 催：南山大学人間関係研究センター  
協 力：心理人間学科合同研究室スタッフ（真野佐知子・堀口久美・大仲ひろみ・光岡真里）  
南山大学学生スタッフ

### 【大会運営委員会事務局】

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18 番地 南山大学人文学部心理人間学科（中村研究室内）  
TEL:052-832-3111(内線 3959) FAX:052-832-3217  
E-mail:nittaiken-jimu@nanzan-u.ac.jp URL:http://www.nanzan-u.ac.jp/NINKAN/nittaiken/